

「導道・三喜別人説」の検討

遠藤次郎、中村輝子

今日の通説では、曲直瀬道三の師匠の田代三喜は通り名を導道と言ひ、三喜と導道は同一人物であるとみなしている。⁽¹⁾この通説は田代三喜に関するあらゆる資料を駆使して検討したといわれる服部甫庵の『三喜備考』(一八八九年)の結論に準拠している。しかしながら、近年、三喜や道三に関する新たな資料が発見され、この中には『三喜備考』の説をくつがえず内容を持つものも少なくない。

著者らは道三の前半期の医学を研究する過程で、これまで注目されなかつた道三の医書、『診脈口伝集』(内閣文庫所蔵)⁽²⁾および『月湖抜粹医学迪蒙』(京都大学富士川文庫所蔵)⁽³⁾の中に「導道・三喜別人説」についての興味深い記述を見出した。本報ではこの記述を他の諸文献と比較しながら、本説の妥当性を明らかにするとともに、これらをもとに、導道と三喜の人物像を明らかにした。

一 内閣文庫所蔵『診脈口伝集』における導道・三喜別人説

『診脈口伝集』は脈に関する道三の医書として著名であるが、内閣文庫所蔵の同書は一般に知られている同名の書とは内容が異なる。本書は「七表八裏九道の脈」、「四脈」、「小児の虎口」など、一般の『診脈口伝集』との共通部分も少な

くないが、記載の順番、表現などを考慮すると、同名の異書として扱うのが妥当である。

内閣文庫所蔵『診脈口伝集』の末尾付近には以下のような文章が記されている。⁽²⁾

①武蔵国二導道ト云人入唐シテ、丹溪ヲツタエテ帰朝シテ、道三是ニ有一伝也。道三初ハ三喜之弟子也。後ニ導道ノ弟子也。然ハ唐ヨリ嫡々相承也。……②翠竹院 一溪道三〔診脈口伝集〕

導道と三喜が同一人物か否かという問題については、古来より多くの意見が提出されているが、導道と三喜に最も近い道三の記述が一番信頼し得るものである。内閣文庫所蔵『診脈口伝集』から引用した文の最後(②)には「翠竹院、一溪道三」とあるところから、この文を記したのは道三自身である可能性がきわめて高い。したがって、この文中(①)で導道と三喜を別人としている点は重要である。

しかしながら、道三の多くの医書を調べても、①以外には導道と三喜の關係にふれた記述を見出すことができない。そこで、おそらく道三が書いたと推定される書物、あるいは道三に比較的近い書物に見られる導道・三喜別人説を次の二〜五節で検討した。

二 『月湖抜粹医学迪蒙』に見られる導道・三喜別人説

『月湖抜粹医学迪蒙』(以下、『迪蒙』と略す)は上中下集からなる三巻本で、中風、傷寒などの九五の病について総説と治療法を簡潔に記している。本書は京都大学富士川文庫に所蔵されるだけで、他の図書館などでは報告されていない。これまでに本書があまり研究されなかった一因として、本書の著者「道喜」が他には見出されず、医学史上、不確定の人物であったことがあげられよう。しかしながら、本書には月湖—江春斎—道喜、という他に類をみない系譜が記されている。本書はかなり問題を含む医書であり、この系譜をそのまま受け取るわけにはいかないが、「導道・三喜別人説」を検討する上では興味ある資料であり、ここで取り上げた。⁽⁴⁾この問題について本書中の主要な記述を以下に列挙する。

③ 祖宗月湖先生ハ入津ノ暇日、諸家ノ秘文ヲ撮テ、全九集要ヲ撰ス、尤モ当流之靈方也。④ 一日、月湖偶然トシテ園中ニ於テ遊ブ。而テ卒ニ雷声ヲ聞ク、曰ク、此ノ雷疾有リ。……(月湖が童子に変化した雷を治療する。童子は御札に何かを授けたいと申し出るが、月湖はこの園中に水のないことから清水を所望する。童子は蛇身に変化して泉を作る)。雷音ヲ作シメ天ニ昇ル。池辺ニ布袋ノ絵、馬ノ鞭ノ両物アリ、是レ則チ童子ノ宝札也。自然来ノカタ、池水、布袋、馬鞭之三物ニ因テ三喜翁ト号ス。⑤ 其ノ後ノ末孫、江春齋ハ接武(アトヲツイデ)、和極集、脈伝、禁好集、能毒集、灸歌等ヲ撰シ、後人ヲ啓迪ス。⑥ 余、マタ、近来之書籍ヲ檢編セシメテ諸学蒙徒ヲ導ク故ニ号シテ抜粹医学迪蒙集ト曰フ。文章ハ古賢之語ニ随イ、葉名ハ月湖之秘伝ヲ著ス。⑦ 柴胡、常山ノ二味ハ他家之用薬ト当家ト甚シク異ナル也。後学ノ人、訂シテ之ヲ用イルハ幸ナランカ。⑧ 于時天文元曆仲冬初吉、三喜末孫、道喜序。(「迪蒙」序文)⁽⁵⁾

⑨ 月湖先生、久シク石淋ヲ患テ、治法効アラズ。大豆ホドノ石、莖中ヨリ二ツ出テ其後平癒シタリト祖師ノ雑談也(「迪蒙」中集、淋病門)

⑩ 集驗方ニ云、夫レ医ニ内外科アルコトハ治ニ内外ノ道アリ。……付葉ハ和国ノ諸流ヲ月湖先生モ良法トス。(「迪蒙」下集、外科論)

はじめに、上述の引用文中に見られる道喜、江春齋、月湖の各々の人物について検討したい。

○道喜

著者らは次の理由から、道喜と道三が同一人物であると推定した。

(i) 別稿で論証するが、『全九集』と『迪蒙』は同一人による編集と推定される。したがって、和訳の『全九集』を著した道三と『迪蒙』を著した道喜は同一人物と考えられる。

(ii) 道三の活動の前半期において、道三は別の名前で医書を著すことがあった。たとえば、初期の『切紙』(『探賸集』)では「雖道」の名を用いている。道三の名は、一説には導道と三喜の名を一字ずつとったといわれているが、道喜の名

も導道と三喜の名の一字ずつに由来すると考えられ、道三の別名である可能性が高い。

(iii)『迪蒙』が引用している医書は『医学正伝』、『玉機微義』、『医林集要』、『丹溪心法』、『惠济方』、『医方选要』、『婦人大全良方』、『明医雜著』などであり、道三の代表作、『啓迪集』の典拠文献と極めて良く一致する。

○江春斎

『迪蒙』では、江春斎は「和極集、脈伝、禁好集、能毒集、灸歌等ヲ撰」した人物とされている。『和極集』、『諸食禁好集』、『能毒集』を著したのは田代三喜(初代)であり、また、田代三喜は江春庵という号を持っていたことから、⁽¹⁾ここにおける「江春斎」は田代三喜(初代)とみなすことができる。

○月湖

『迪蒙』に記された月湖の特徴は、中国に留学して帰国した日本人(③、⑩)、ならびに、道喜(道三)に直接に口訣を与え得る人物である⁽⁸⁾(⑨)。このような月湖の実像は、通説のような、中国に留学していたときの導道の師匠とは考えにくい。

一方、③の記述から、月湖が『全九集』関係の医書を中国から持ち帰ったと推定され、このことは、導道が『全九集』を中国から持ち帰ったという通説に重なる。このことから、『迪蒙』における月湖は導道と同一人物であると考えられる。導道と月湖が同一人物であると主張する文献は少ないが、その一つに『切紙』があげられる。著者らはすでに『切紙』ならびに『探蹟集』にみられる月湖について検討し、月湖と導道が同一人物であることを推定した。⁽⁶⁾『迪蒙』における月湖の扱われ方は、著者らが『切紙』で明らかにしたのと類似し、両書が同じ立場にあると考えることができる。

以上の結果を総合すると、月湖は導道、江春斎は三喜、道喜は道三と、それぞれ同一人物と理解され、本書が導道・三喜別人説に基づいていることがわかる。また、本書における導道(月湖)が中国より医学を持ち帰り、三喜(江春斎)と道三(道喜)がこれを継承したという医学の系譜は『診脈口伝集』にみられるものと一致しており、両書は同じ立場に

あることがわかる。

三 『涙墨紙』の序にみられる導道・三喜別人説

死期に近い病床にあつた導道が道三に口述したとされる『涙墨紙』に序文が附されている。この序文は寛文十二年（一六七二年）に記され、道三によるものではないが、そこに記された以下の文は『診脈口伝集』の①の部分⁽⁹⁾を補完する内容を含んでいる。

①曾導道入明……。時有古河三喜者、乃導道之高弟也。曾同船入明同学。故溪以二子為師、学成而采二子之名上字、以自号道三。（『涙墨紙』序）

ここでは、三喜は導道の高弟と記している。

四 諸家譜にみられる導道・三喜別人説

今日に残されている三喜や道三に関する家譜を調べると、そのほとんどにおいて、導道と三喜を別人として扱っている。例えば、『今大路家記鈔』の「当流医学之道統」では、導道を「明監司」、三喜を「頤生軒」の弟子としている。⁽¹⁰⁾また、同書には次の一説も引用されている。

⑫一溪道三就導道学医、一説曰、鎌倉建長寺有僧、曰江春、曰三喜、曾有明船漂著金沢、其船中多医書、江春三喜取之学医术藥稍彰、道三先就三喜学医、後受得導道術云（『今大路家記鈔』）

ここでも、道三は初めに三喜に学び、次に導道に学んだ、と記され、これは『診脈口伝集』の記述に一致している。⁽¹¹⁾⁽¹²⁾『寛政重修諸家譜』でも、以下のように導道と三喜を別人として扱っている。

⑬正盛（一溪道三）……享禄元年関東に下向し、下野国足利の学校文伯にしたがひ、群書をまなぶ。四年はじめて善道

について医を学ぶ。善道諱は三喜、範翁と号す。また、支山人導道の門に入、方書の要書をうかがひ、医術の奥義をきはめ、諸方の可否用薬の効能ことごとく弁知せずといふ事なし。(『寛政重修諸家譜』)

ここでも、引用文①や⑫と同様、初めに三喜に、続いて導道について医術を学んだと述べている。

五 沢庵著『医説』にみられる導道・三喜別人説

沢庵(一五七三〜一六四五年)は道三の晩年に重なる時代を生きた人である。彼は『医説』の中で次のような説を記している。⁽¹³⁾

⑭中古に丹溪といふ名医うまれて……医道をひらきたるなり。其筋を、日本より一人の律師あり(て)。(出家なり)渡唐して丹溪の流を伝へて帰る。足利の三婦、其流をうけて関東にばかりひろまりてあるべきを、古、道三二溪といひし人、関東へ下り、此流を伝へて上洛しけるが……。 (沢庵『医説』)

ここでも、導道とみられる「律師」と三喜を別人として扱っている。沢庵は三喜や道三の流派には所属していない。したがって、この説には客観性があり、また、道三とほぼ同時代に生きた人が当時の一般的な説を記したものととして、有意義である。

六 導道・三喜同一人物説

導道と三喜は同一人物である、とみなす立場が今日では一般的である。本節ではこれを検証してみたい。

導道・三喜同一人物説を初めて唱えたのは黒川道祐であり、彼の著書、『本朝医考』(寛文三年、一六六三年)に次のように記している。⁽¹⁴⁾

⑮導道・諱三喜、自号範翁、又称支山人、寛正六年四月八日産於武州河越、及中年入于大明、留居十有二年、学東垣

丹溪之術、携医家之方書帰于本朝、……天文六年二月十九日七十三歳而卒（黒川道祐『本朝医考』）

ここでは「導道、諱（いみな、実名）は三喜」として、導道と三喜を同一人物としている。「本朝医考」以後の医書、すなわち、奈須恒徳『本朝医談』、弁河尚敬『古今人物考』、浅田栗園『皇国名医伝』、服部甫庵『三喜備考』などはこの説を採用し、導道・三喜別人説はみられなくなり、同一人物説へと変わっていく。しかしながら、これらの内容を仔細に検討しても、いずれも導道と三喜が同一人物であることを納得するに十分な論拠を示していない。

七 『迪蒙』にみられる先代三喜・導道同一人物説

『迪蒙』の序文で先代田代三喜と導道（月湖）が同一人物であるとの説が述べられている④。前節の「導道・三喜同一人物説」との対比から、この説を検討した。

医史学の分野では三喜が何人も存在したと提唱する人は少ないが、国史学の分野では三喜複数説は定説となつて⁽¹⁵⁾いる。すなわち、国史学の分野で対象とする三喜は古河公方に医師として仕えた田代家の人々である。この医家の系譜の人々の多くは三喜斎を名乗った。初代の三喜斎は、その活躍年代から判断して、医史学で一般にいわれている田代三喜（三掃）『和極集』などを著した人物と認められている。したがって、初代三喜斎以前に三喜が存在するという『迪蒙』の説は医史学の分野にも国史学の分野にもなく、その点では疑問の多い説である。ただし、これが後人によるものではなく、道三自身の説であるところから、これを無視することはできない。本説の意図は別報で考察することにし、⁽⁴⁾ここでは本説を紹介するにとどめたい。

④に述べられているように、導道（月湖）が三喜を名乗っていたとしたら、まさしく、これは道三が「導道・三喜同一人物説」を記したことになる。しかしながら、ここに記された三喜は一般に認められている田代三喜ではなく、三喜の先代に当る人物である。この記述が紛らわしく、混乱を招きやすいことを考え合わせると、後代の「導道・三喜同一人

「物説」は、あるいは、『迪蒙』における道三のこの記述に由来するかもしれない。

八 導道と三喜の没年

導道と三喜を別人として扱おうと、これまでの同一人物説では理解できなかった諸問題を容易に解決できる。その最も顕著な例が三喜の没年である。通説では三喜の没年は天文六年（一五三七年）、あるいは天文十三年（一五四四年）とされている。前者は『道三家譜』などにみられるものであり（⑩）、後者は古河の永仙院過去帳によるものである（⑪）。

⑩ 「老師導道先生者……天文六年（一五三七年）二月十九日行年七十三歳而逝去」（『道三家譜』）

⑪ 「天文十三年（一五四四年）甲辰四月十五日三喜一宗居士」（永仙院過去帳）

これらを導道・三喜別人説で考えるならば、⑩の記述から天文六年は導道の没した年、⑪の記述から天文十三年は三喜の没した年とみなすことができる。

以上の年代を基に、道三が導道や三喜と交流をもった期間を明確にしておきたい。後節で詳しく述べるが、道三が導道に初めて会ったのは享祿四年（一五三一年）といわれている⁽¹⁷⁾。天文六年（一五三七年）に導道が他界しているので、導道と道三は七年という短い師弟関係であったことになる。一方、三喜が天文十三年に他界した後、道三は師を弔い、翌年、天文十四年に関東から京都に帰ったといわれている⁽¹⁸⁾。道三が導道に出会う以前から、道三と三喜は交流をもっていたので、三喜と道三の師弟関係は少なくとも十四年間以上はあったことになる。

九 導道ならびに三喜から道三への奥義の伝授

導道が道三に奥義を伝授したことがいくつかの資料に散見される。

⑬ 導道和尚、大衆ノ御弟子多有ト云ヘドモ、御遷化之時分、道三計リシテ十箇条口伝此巻物ヲ御相伝有シコト……（『涙

墨紙⁽⁹⁾

⑱武蔵国二導道ト云人入唐シテ丹溪ヲツタヘテ帰朝シテ、道三是二有一伝也〔診脈口伝集〕⁽²⁾

⑳(道三)三十才、天文第五年二月二十六日、自老師範翁的受当流医道之奥儀、即是唯授一人之六通也〔当流医学之源委〕⁽¹⁷⁾
これらは共通して、導道が道三にだけ奥義を伝授したと述べている。この奥義の伝授は流派の継承を意味するので、導道・三喜別人説からすると、いささか複雑な様相が想定される。すなわち、道三が導道に弟子入りする以前から、導道のもとには高弟として三喜がいた。この三喜を差し置いて、導道が道三にだけ奥義を伝授したのは何故であろうか、という疑問である。これを解決するには多くの資料を用いて論証する必要があるが、本報ではこれを略すが、道三は導道と三喜の両名から奥義を継承したと自ら認識していたことを明らかにすることができる。⁽¹⁹⁾すなわち、継承の道筋は導道から三喜、三喜から道三ではなく、導道と三喜の両名から道三へであったとみなすのが妥当である。これについては改めて論考したい。

十 渡明十二年

「導道あるいは三喜が中国(明)に渡り、留学すること十二年。李朱医学を学んで帰国した」との出来事は日本の後世派の医学を方向づけたとして重視されている。この渡明十二年について、導道・三喜別人説の立場から再考したい。⁽¹⁷⁾⁽²⁰⁾

まず、導道が明に十二年間留学していたことは諸資料の一致するところであり、大きな問題は認められない。一方、三喜については資料によって見解が相違している。前出の『涙墨紙』の序⁽¹¹⁾では、三喜が導道と共に明に渡ったと述べているが、『油蒙』⁽³⁾、⁽⁵⁾、『今大路家記鈔』⁽¹²⁾、『医説』⁽¹⁴⁾では、三喜が明に渡ったとは記していない。いずれの説が正しいかの確証はないが、著者らは次の理由により、三喜は明に渡っていないと推定している。

(i) 国史学の分野において古河公方に仕えた三喜(斎)に関する諸資料が明らかにされているが、この中に、三喜の

渡明についての記述は認められない。

(ii) 三喜の医学を検討すると、彼の医学は李朱医学一辺倒ではないことがわかる。すなわち、三喜は日本の民間薬をしばしば使用するなど、彼の治療には土着的な傾向が見られ、また、彼の著作『酬医頓得』からもわかるように、仏教医学的な側面も強い⁽²²⁾。

(iii) 三喜の医書中には、中国の医書からの直接の引用がほとんど見られない。このことは三喜が導道を介して中国の医学を学んだことを示唆している。

(iv) 道三の医書中には、ほとんどの場合、導道の名だけが登場する。自分が継承した医学(当流)は師が中国で直接に学んできた医学であることを強調するためであったと思われる。これに対して、道三の医書中に三喜の名があまり登場しない。このことは、三喜が渡明していないことを暗示している。

十一 導道が活躍した地域

導道と三喜が活躍した地域について、導道・三喜別人説の立場から再検討してみたい。

『診脈口伝集』(①)をはじめ、多くの資料に、導道が武蔵の国の人であると記されている。導道は武州の越生に生まれたといわれているが、彼が活躍した地域は越生とは限らないことが次の資料から窺える。

②一 溪翁詣柳津虚空藏祈医術、帰路過古河、遇導道伝其道(『今大路家記鈔』)

ここに示したように『今大路家記鈔』では、道三がはじめて導道に会った場所は古河付近の地であるとしている。古河は下総国に属し、武蔵国ではないが、武蔵国、下野国、上野国に近接している(図一)。

導道が活躍した地域を考えるに際し、次に示す『啓迪集』の策彦周良の題辞が注目される。⁽¹⁾

②② 奇なる哉、爰に当塗の聞人有り。世々京華の人なり。諱は道三、字は一溪、……直ちに野州足利に入つて、五典三

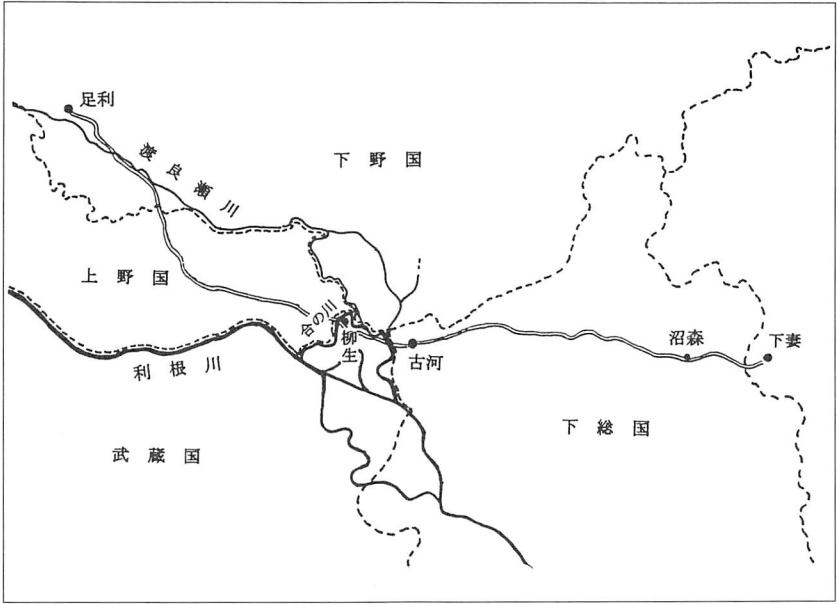


図1 道三の足利学校時代の足利、柳生、古河、沼森

墳及び丁林曰(曆)の書を涉獵す。維時武州に、導道練師
 という者有り、中年に国信使に従つて南遊し、關国諸医
 の門を遍歴して、其の尤を択び、其蹟を探つて帰る。公
 ゆきて以て之を師とし、学習精を研ぎ、思いを覃くして
 其の蘊奥を究む。野武二州の間に兩往風還して、前後十
 有八の葛裘を更えて洛に旋り、徐徠医療験し有りて、瀕
 九の病を活す。(『啓迪集』策彦周良題辭)

ここでは、下野国の足利に居住していた道三が、武州
 の導道に教えを受けるため、足利と武州の地との間を何
 回となく往復したと記している。

②1および②2、ならびに土地柄を考慮して、著者らは、
 導道は下総国古河に程近い武州の地に本拠地を置いてい
 たのではないかと推定している。足利と古河の間には
 主要な街道が当時から通じており、したがって、道三が
 足利と古河付近のその地をしばしば往復したであろうこ
 とは想像に難くない。

服部甫庵の『三喜備考』では、導道の居住地は武州の
 川越ではないかと考察している。しかしながら、何度も
 往復するには足利と川越は遠すぎるように思われる。

一方、『今大路家譜』の記事は道三が導道に会った地を特定している。

②③享祿四年辛卯十一月到柳津之間、適謁醫師導道（『今大路家譜』⁽²³⁾）

ここでは、道三が「柳津」という場所で導道に会ったと記している。しかしながら、柳津という地名を古河付近に見出すことはできない。この件に関して、古河市在住の川島恂二先生が興味深い見解を提出している。すなわち、古河の西北七キロメートル程のところに北川辺村柳生という場所があり、当時そこには「合の川」が流れており、この柳生の津（わたし）が「柳津」であろう、としている⁽²⁴⁾。著者らもいくつかの理由から、この説を採りたい。

その一つは、この地は足利と古河を結ぶ街道沿いにあり、道三が足利からしばしば通ったとするには、条件が適うことがあげられ、また第二には、柳生は古河には近いものの武蔵国であり（図一）、先に推定した導道の本拠地付近の条件を備えている。

柳津の件に関して、福島県会津の柳津ではないか、という見解も提出されている⁽²⁵⁾。しかしながら、②③に「柳津の間」とあるところから、「柳津」は正式な名称というよりは「柳生の津」の意味であり、「柳津の間」は「柳生の船着き場と船着き場の間」と解するのが妥当であろう。柳生周辺には河川や沼が多く、多くの渡しがあつたと推定される。

②と③の記述は、道三が導道に初めて出会ったことを記している点で共通しているが、両者の間には相違点もある。両者を補充しながら読み合わせると、次のように解される。「道三は足利から古河へ向かう途中、柳津で虚空蔵菩薩に美術修得の祈願をした。古河からの帰路、同じ柳津で導道に巡り合つた」。この記事のいわんとするところは、導道との出会いが虚空蔵菩薩のお引き合わせである、ということにある。当然のことながら、このような記事は道三と導道の出会いを権威づけるためのものであり、そのまま受け入れるわけにはいかない。恐らくは、道三は「古河の三喜」に会うために古河に出向き、三喜に勧められて、帰路、導道に会った、とするのが無理のない解釈であろう。

十二 三喜が活躍した地域

三喜が活躍した地域に関して、従来の医史学の分野での結論と国史学の分野での結論との間には大きな隔たりがある。まず、医史学の分野での資料から検討していきたい。

三喜の代表的な著作とされる『和極集』⁽²⁶⁾に「往国関東下野足利三帰廻翁」とあり、『能毒集』⁽²⁷⁾に「足利之住僧三帰廻翁」とあるところから、三喜が足利に居住していたといわれていることがわかる。一方、あまり知られていない医書ではあるが、『愚按療治本』(富士川文庫)に「古河三喜撰」と記されている。「足利の三帰」と「古河の三喜」を別人とする意見もあるが、以下の理由により、両者は同一人物とみなすべきであろう。

(i) 古河の三喜と記された『愚按療治本』と足利の三帰と記された『和極集』および『能毒集』には、特徴的な「作字」が共通して用いられており、これらは同一作者によるものと推定される。

(ii) 『当流大成捷徑度印可集』(宮内庁書陵部)の最後に、「関東下野足利意足軒三帰廻翁、後三喜改之」とあり、三帰と三喜は同一人物であると記されている。

(iii) 「足利の三帰」による『能毒集』は後に道三に伝授された。その経緯について『薬性能毒』では、「此能毒ハ……道三ノ作也。然トモ水上ハ江春ノ家三喜ヨリ相伝之所也。関東ニテモ公方之医師也」と記している。⁽²⁸⁾ このことより、「足利の三帰」と古河公方の医師である「古河の三喜」が同一人物であることがわかる。

なお、医史上の通説では、三喜は越生、古河、足利などの地を転々と移り住んだ、とされている。⁽¹⁾ しかしながら、この説は国史学の研究成果からは否定される。⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾ すなわち、三喜は古河公方の医師という重要な任務を担い、また、古河公方から与えられた一定の地所を保有していた。したがって、治療の目的で出張することはあっても、居住地を転々と変えたとは考えにくい。

ここで、国史学の分野での研究成果をふまえて、三喜の活躍した地域を検討したい。国史学の分野での研究の対象は古河公方の医師としての三喜齋である。当時、彼は「足利の三帰」ではなく、「古河の三喜」として名を馳せていた。その一例を示す。

②④「兼載は坂東道五十里計隔て、下総国古河といふ所に、所労のこと有りて、江春庵(三喜)とて関東の名医、そのかたにて療治あり」(連歌師宗長『東路の津登(永正六年、一五〇九年の条)』)

さらに国史学の分野では、次に示すように、三喜齋の居住地は下総国沼森であることを明らかにしている。

②⑤三喜齋、居沼森村「永正十一年(一五一四年) 円福寺記録」

②⑥「こうしゅん(江春)庵、ぬまかり(沼森)と申所御出候」(『坂東道者日記』永正十五年(一五一八年))

沼森と古河は下妻街道でほぼ直線的に結ばれており、三喜齋はその間を往復しながら古河公方に医療奉仕をしていたとされている。また、三喜齋の次の世代も沼森に居住したことが明らかにされ、三喜齋の家系が足利に移住した史実は報告されていない。

医史学の資料から推定される足利に居住した三帰が正しいか、あるいは、国史学の研究から推定される沼森に居住した三喜齋が正しいのか。この点に関しては、国史学では当事者の手紙などの資料を用いて実証的に検討を進めており、その信憑性はより高いように思われる。

それでは、医史学上の「足利の三帰」をどのように理解すべきであろうか。医史学上の「足利の三帰」は『十巻書』⁽²⁹⁾に由来し、この書の編集は道三によって行われたと推定されることから、「足利の三帰説は道三によって創作された可能性が高い。⁽³⁰⁾」その論拠の一つとして、次の点をあげることができる。すなわち『十巻書』の一つ、『大成捷徑度印可集』は大永五年(一五二五年)に著され、著者名を「足利三帰」とし、また、この中で「足利の三帰、後に三喜に改む」と記されているが、この年には、沼森に居住する三喜はすでに名声を得て活躍中であつたことが国史学の分野での資料で明

らからであり(25)、(26)、足利の三帰が後に三喜に改めたという記述は妥当性に乏しい。道三が継承した当流の師匠、「三帰」の居住地は沼森などという田舎ではなく、当時の学問の中心地、足利である必要があったため、このような創作が行われたと思われる。

謝辞

曲直瀬道三、田代三喜に関する諸文献をご教示頂いた北里研究所・東洋医学総合研究所の小曾戸洋先生、茨城大学の真柳誠先生、京都府立医科大学の新村拓先生、京都大学の松田清先生、川島眼科医院の川島恂二先生、元塩野義製薬株式会社の桜井謙介先生に深謝します。また、諸文献の閲覧の御許可を頂いた武田科学振興財団杏雨書屋、京都大学医学部図書館に深謝します。

文献および注

- (1) 矢数道明『近世漢方医学史』、名著出版、東京、一九八二(昭和五十七年)
- (2) 内閣文庫所蔵(一九五―六〇)『診脈口伝集』
- (3) 京都大学富士川文庫所蔵(イ・27)『月湖抜粹医学迪蒙』
- (4) 本書についての詳細な検討は、「月湖編纂『全九集』の諸問題」『漢方の臨床』四五巻一―二号、三六―四七頁、東亜医学協会、東京、一九九八(平成十年)参照。
- (5) 序文のみ漢文体
- (6) 『探隨集』の最後の識語に「右二十巻者雖道奥儀之切紙也」とある。「切紙」に関する検討は、遠藤、中村「曲直瀬道三著『切紙』の再検討」『漢方の臨床』四五巻九号、一〇―一二頁、東亜医学協会、東京、一九九八(平成十年)参照。
- (7) 道三は自らの名の由来について時代によって異なった解説をする。導道と三喜の名の一字づつを採った、という説は恐らくは原義ではない。道三の名の由来については本誌「曲直瀬道三の前半期の医学(一)」(投稿中)参照。
- (8) ⑨の「祖師」は③の「祖宗月湖先生」との対比から月湖を指すと推定される。

- (9) 服部甫庵『三喜備考』(京都大学富士川文庫)所引の「涙墨紙」
- (10) 『今大路家記鈔』『中外医事新報』一一三二〜一一四二号、三八〇頁、一九二八(昭和三年)
- (11) 京都府医師会編『京都の医学史』二二二〜二四六頁、思文閣出版、京都、一九八〇(昭和五十五年)
- (12) 前掲文献(11)の引用する『寛政重修諸家譜』では③の如くであるが、『新訂寛政重修諸家譜』(続群書類従完成会、昭和四十年)では「善道について医を学ぶ、善道諱は三喜、範翁と号す。また」の箇所を欠く。前者の原記載は未見。
- (13) 沢庵『医説』、三枝博音編『日本哲学全集・七』一六〇頁、第一書房、一九三六(昭和十一年)
- (14) 黒川道祐『本朝医考』、『近世漢方医学書集成四〇』一一七頁、名著出版、東京、一九八一(昭和五十六年)
- (15) 佐藤博信『古河公方足利氏の研究』四一五〜四三七頁、校倉書房、東京、一九八九(平成一年)
- (16) 大圖口承「田代江春庵と医聖三喜齋(上)」『埼玉史談』四二巻二号、一九九五(平成七年)、「田代江春庵と医聖三喜齋(中)」『埼玉史談』四二巻四号、一九九六(平成八年)、「田代江春庵と医聖三喜齋(下)」『埼玉史談』四三巻一号、一九九六(平成八年)
- (17) 『当流医学之源委』杏雨書屋所蔵、乾五四四五
- (18) 『迪蒙』の序にある天文元年(一五三二年)は、道三がはじめて善道に会った年(享祿四年)の翌年に当る。
- (19) 『涙墨紙』の中には善道から伝授されたものと三喜から伝授されたものが認められる。
- (20) 道三『合葉直伝集』延令丹の項に「当流奥伝之秘法、善道在唐之時……」とある。
- (21) 桜井謙介「三喜と道三」、山田慶児・栗山茂久編『歴史の中の病と医学』一四七〜一六八頁、思文閣出版、京都、一九九七(平成九年)
- (22) 遠藤、中村、梁、奈倉「『酬医頓得』に見られる田代三喜の医説(一)」『日本医学雑誌』四四巻一号、七三〜九〇頁、一九九八(平成十年)
- (23) 原昌克『三喜直指篇』所引
- (24) 川島恂二「医聖田代三喜の子孫」『古河市医師会報』二八号、七〜一三頁、一九九六(平成八年)
- (25) 矢数道明『漢方治療百話』第六集、五二二〜五三二頁、医道の日本社、横須賀、一九八五(昭和六十年)

- (26) 大塚敬節・矢数道明編集『近世漢方医学書集成、一、田代三喜』、名著出版、東京、一九七九(昭和五十四年)
- (27) 『能毒集』杏雨書屋所蔵、前掲文献(26)の「薬之部」に同じ。
- (28) 宗田一「曲直瀬道三の『薬性能毒』について」『和漢薬』五〇〇号、一五〇頁、一九九五(平成七年)
- (29) 『三喜廻翁医書』(前掲文献(26)に同じ)は『三喜十卷書』(『十卷書』)であろうといわれている。
- (30) 『三喜十卷書』が道三により編集されたことについては別報で報告したい。

(東京理科大学薬学部)

A Study of the view that Dodo (導道) and Sanki (三喜) Were Different Persons

Jiro ENDO and Teruko NAKAMURA

Dosan Manase (1507-1595) was the noted pioneer of the Goseiha school in Sino-Japanese traditional medicine. He was the heir to the medical thought of his teacher, popularly held to be Sanki Tashiro, alias Dodo. According to this perception, Sanki and Dodo were the same person. However, we found the following interesting accounts in Dosan's "Shinmyakukudenshu (『診脈口伝集』)": He had two teachers, Dodo and Sanki Tashiro. That is to say, Dodo and Sanki were not the same persons. Through extensive investigation of other literature on Dodo and Sanki, the time period of their activity, their geographical base, and their medical thought were ascertained. Dodo was based in Yanaizu (Yagyū), Musashi province, and died in 1537. His medical thought was founded on "Yu ji wei yi (玉機微義)" by Liu Chun (劉純). On the other hand, Sanki was based in Koga, Shimofusa province, and died in 1544. His medical thought showed a marked tendency towards Buddhistic and indigenous medicine. These results are worthy of note because they demonstrate even more clearly that Dosan has two teachers, Dodo and Sanki Tashiro, thus disproving the generally established opinion that Dodo and Sanki were the same person.